

ヤノコモンタマムシ採集の経緯

森 博

この程知人から下記のような情報を得ました。

“黒沢良彦博士が1970年甲虫ニュース版8誌上で有馬温泉に於てヤノコモンタマムシ *Poecilnota chinensis yanoi* Y.Kurosawa が数頭採集されたと解説されている。(データも採集者(名)もない)”

これについて採集当時の状況をもう少し詳しく記録しておいた方が良くと考え此処にその経緯を述べておきたい。

1966年私は大山でのゼフルス採集を終えて帰宅したところ、当時三田学園高等学校1年だった長男の正人が学園内で昼休み中に見なれぬ甲虫を採集し昆虫大図鑑で調べたところ、どうやらクロコモンタマムシらしいと少々興奮気味であった。見速その3頭を写真に収めて黒沢博士に同定をお願いしたところ折返し次のような御返信をいただいた。

“お送り頂いた写真を見ると翅端が削られ翅鞘の間室が脈状に隆起しているのでヤノコモンタマムシに間違いはないのではないかと思います。この種類は私の手許にある「三重」と云うラベルのついた矢野宗幹先生のコレクションの中にあつた1頭だけによって私が記載したもので極めて稀な様で私はこの標本以外に日本産の標本を見たことがない。しかもこれは産地不明確のかなり傷んだ標本唯1頭で書いたので、これが果して本州産かどうかには自信がなく自分でも疑っていた様な次第のところ、間違なく本州産であることがはっきりし雀躍しております。つきましては甚だ申し難いことですが御採集の♂♀をお譲り頂けませんか”

とあつた。息子に相談したところ快諾してくれたので1♂を手許に残しデータを明記して交尾中だった♀を直ちに科博の黒沢博士に送附したところ下記のような返信がとどけられた。

“標本を拝見しその大陸産のクロコモンタマムシによく似ているのに一驚しました。しかし前胸や翅端の形は紛れもないヤノコモンタマムシ *P.yanoi* Y.Kでした。或いはこの種は大陸のクロコモンタマムシの亜種にする方が適当かも知れません。更に面白いことにずっと以前に関西の同好者から南米産と称する *Poecilnota* 属のもの1頭をもらったことがあり南米にはこの属のものは産しないので、一見大陸のクロコモンタマムシによく似ているところからその中に入れておいたのですが、それがこのヤノコモンタマムシに当るものでした。産地も採集名も全く判らぬが関西のどこかで採れたものと思う。関西では稀ながら採れるらしく思われます。”

さて肝心のそのデータは次のとおりです。

採集地、三田学園内。2♂1♀。24、6、1966。採集者、森正人。

採集した2♂1♀の内1♂1♀は黒沢良彦博士が所蔵され1♂は森正人が現在も持っている。採集場所は学園内の池の土堤で加害木の樹種は明瞭でない(但しポプラではない様だ)径10㎝余りの生木。この時なお1頭がいたのだったが見失ってしまった。以後の2ヶ年同時期頃にその立木での再発見に期待をかけたが徒勞に終わった。この正人は北大農学部卒業後も札幌に居住してオサムシ、ゴミムシなどの甲虫類の採集をつづけている虫キチです。

最後に13年前に於ける黒沢良彦博士の御同定を深謝し、かつ無断で御書翰の内容を転記した事をお詫び申し上げます。

ヨツモンカメムシ音水溪谷に産す

高橋寿郎

ヨツモンカメムシ(*Urochela quadrinotata* Reute)は体赤味を帯びた褐色で、各半翅鞘上に2黒紋、小楯板にも小黑紋をそなえ、結合板上に黒色横帯がある中型の美しいカメムシであり、凶脱も割合ある(平山、1942。江崎、1950。宮本、1965。立川、1976。)。山岳地帯のオヒョウ、ニレ、ハシバミなどの樹上で生活して採集困難な種であると云われている。産地もそれ程多く知られていないようである。

本年(1979)5月21日、三木進氏と宍粟郡音水溪谷に採集に行った際、三木氏が叩き網で1♀(体長17mm)を採集された。兵庫県下からは今迄記録の無かった種である。

8月末にはまだ幼虫で新成虫は9月に現われるとある(宮本、1965。立川、1976)。従って秋に採集出来ることが多いのではないだろうか(平山、1942)。成虫越冬のようで冬季ケヤキの大木の皮下で採集したという報告がある(昆虫と自然、1967)。本年採集したものは越冬成虫なのか、それにしては非常にきれいな個体であった。標本は三木氏の御厚意で筆者が保管している。